

コメント

細見 和之, 崎山 政毅, 高橋 秀寿(司会)

司会 国民国家の謎解きを頭の体操でやるという、離れわざをやっていただきました。だいぶ時間も押しております。それで、学外からコメントーターの方がいらっしゃっておりますので、まず細見(和之)さんのほうからお願いします。

細見 何をコメントとして話すか、いろいろ思ったのですが、この間、日本とか日本人という問題を考える際に、ほくなり考えていること、こだわっている視点がひとつありますので、そのことをお話しすることにします。

ナチの<ホロコースト>を描いた長大なドキュメンタリーに『ショアー』という映画があります。ほくはこの映画の日本語字幕の作成に西成彦さんたちと関わったのですが、あの映画の後半に、チェコ出身のユダヤ人たちが脱衣所のなかで、のちにイスラエル国歌になる「ハティクバ」(希望)という歌とチェコの国歌を歌ったという、非常に感動的なエピソードが語られています。全員殺戮されるのですが、その直前に脱衣所のなかに歌声が響きわたったわけです。これを証言しているのは、殺された人々と同郷のユダヤ人特務班の人です。

ほくは、その場面を観ながら、そういう時、自分ならどうするのだろうか、と非常に素朴に思ったわけです。ほくにはそんな場面で歌う歌があるだろうか。いや、そもそも一緒に歌う歌などいない、という考え方もあるでしょうが、それでも自分ならあれを歌うかもしれない、そういう歌がほくにはあるのです。そう思ったときに、自分にはパトリオティズムというものがあるな、とあらためて考えました。

誤解ないように言っておきますと、その歌はけっして「君が代」などではありません。ほくの生まれ育った故郷の歌です。ですから、この場合の「パトリオティズム」もけっして愛国主義のことではありません。

愛郷主義とか郷党主義のことです。ほくは、自分の故郷の人々が一緒に殺されてゆくとき、みんながその歌を歌って死んでゆくという場面なら、ある程度リアリティをもって思い浮かべることができるのです。これはそれなりに自分が年を食ったということかもしれませんが、自分にとっての故郷というものを、最近強く感じるようになったのです。

ほくは国籍としては日本に属して、「日本人」であるわけですが、少なくとも日本人の内部で議論がなされる際には、自分を一元的な日本人と扱われるのに非常に抵抗を感じます。具体的にはほくは京都のすぐ裏手にある篠山というところで18歳まで過ごしてきた人間ですが、最近よく言われる「サバルタンは語れるのか」という議論を借りると、ほくの場合は「田舎者は語れるのか」という言い方になります。田舎者が田舎者として語るのはいったい可能なことなのか、ということです。一方で、田舎者には都市の言語である標準語が強要される。ほく自身までは故郷の言葉を自然に話すことはもうできない人間です。また他方で、田舎者には典型的な方言を語ることが強いられたりします。テレビ・ドラマなどの方言指導なんかにはそういう側面があります。つまり、標準語をきちんと話すか、モデル的な方言を話すか、そういうどちらかの存在としてしか田舎者は表象されない、ということがあるのです。

ほくの故郷の篠山は典型的な城下町でしたが、この四月に市になりました。市になるのには元来は5万人以上の人口が必要なようです。いろいろ町を合併したのですが、やはり4万7・8千人にしかなりません。そこでほくの田舎の長老たちが国会議員のもとに陳情にまわって、何とか「特例措置」というものが作られたそうです。将来迅速に5万人に達するであろうという地域に関しては、その時点で市として認めるといふものです。篠山市はその特例適

応の第 1 号だそうです。

ぼくが育ったのは篠山城の近くの立町というところですが、少し歩きますとかつてのメイン・ストリートである河原町にでます。ぼくは大学は大阪でしたが、所用で京都にいきますと、やっぱり「河原町」という大きな通りがある。ぼくは不思議な気持ちでしたが、考えてみれば当たり前の話です。要するに京都をモデルにして作ったのが、ぼくの田舎の町ですから。河原町があり、やはり祇園祭とそっくりの秋の祭りがあつたりします。しかし、ぼくの故郷の人々は実は京都にたいしてさほど憧れをもっていません。ぼく自身もそうです。ぼく自身祇園祭にも一度も行ったことがありません。子供のころ故郷で自分が関わった祭のイメージが強くて、どうも本家本元の祇園祭にかえて嘘臭いものを感じるようです。

ですから、京都に一番近くて、それでいて京都から一番離れている町、それが篠山だと自分では思っています。そこには、どう見ても京都のミニチュアとしか思えない文化があり、祭りがあって、町名まで京都風にしか付けられていない。ひたすら京都の文化を模倣することをつうじてしか、自分たちの文化を作り出せなかった。そして、そんな具合にとても自分たちの文化と呼べないような模倣文化を縮小再生産しながら出来上がった文化でありながら、ぼくはそこに山ひとつ峠ひとつ隔てただけのところに存在する京都とは、やはり別種のものを感じるのです。

他方で、京都への無関心と背中合わせのようにして、篠山にはある種の東京志向があるように思います。これは日本のどの地方もそうでしょうが、篠山は明治以来の大日本帝国に決定的に組み込まれてきました。そういう大日本帝国で、男性の場合の立身出世の一番の近道は「立派な軍人」になることでしたが、篠山も何人かそういう軍人を輩出しています。そして実際、帝国陸軍を最前線で支えたのは、地方の百姓出身の「皇軍兵士」たちです。京都の文化を一生懸命模倣し、東京に憧れ軍人としての立身出世をもとめ、最終的には大日本帝国の兵士として他国への侵略に駆り出されていった、それがぼくの田舎の祖父や曾祖父の姿です。その歴史をぼくなり

らためて考えなおしたいと思っています。

日本国籍を有するひとりとして、ぼくはまちがいはなく日本人としての責任を負うわけですが、そこからあらためてよい日本を作りましょう、というような議論にすんなりとは参加できません。「日本」自体が、けっして一枚岩ではないわけで、同じ日本人じゃないかと「日本人」から同意をもとめられたりすると、とても抵抗を感じます。すくなくとも明治以来の「日本」の枠で生きてきた、また生きざるをえなかった故郷の悲惨さを考えれば、ぼくとしては「日本」自体をまず括弧に入れて、「日本」とはべつの共同性の枠組みをぼくなり

に考えたくになります。そんな方向で、自分のなかのパトリオティズム、愛郷主義について考えているところです。たとえば「サバルタン」について語る場合にも、そういう自分の視点や立場も組み込めないものか、と思っています。簡単ですが、これでぼくのコメントに代えさせていただきます。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。つづいて、崎山政毅さんをお願いします。

崎山 崎山です。実はシンポジウムが始まって、西川先生の話や岡さんの話を少し聞き、そして岡さんの話が始まった直後に、私、京都大学でゼミがありまして、今日はアルゼンチンからの留学生が最後に発表したいということで、どうしても行かなくちゃいけないというので、戻ってきましたら、頭の体操をやっていたというので、果してコメントをやっているのだろうかということがあるのですが、図々しくしゃべらせていただきます。

サバルタンを巡ってということ、2 点ほどです。1 点目は岡さんのお話の中で一番最初に出ました、トランスレーションを巡っての話です。たぶん今日ここにいる人間の中で、一番精神的にチンピラなのは僕だろうということなので、わざわざそれを言おうと思って、現物を持ってきたのですが、京大に忘れてまいりました。サバパスタ民族解放軍というメキシコの最南部でちょっくらがんばっている人たちがいるのですが、その副司令官のマルコスが童話を出したのです。95 年にメキシコの中で海賊版で何十万部も売れて、ようやくアメリカ合衆国でスペイン語と英語との、形としてはバイリンガルで出さ

れた、非常に短いお話なのです。ただ英語版が訳された素になっているスペイン語というのは、チアパス州に生きている先住民たちが使っているスペイン語を、副司令官マルコス自身がフィルターになって、書いた童話なのです。

そこに書かれているスペイン語というのは、話している先住民たちにとってみたら、果して第一の言語なのかというと、おそらくこれは違うわけです。自分たちの使っている母語を使い、そして又、一緒に生きている、エスニック・グループとしては違うかもしれないけれども、やりとりをしている人たちの言葉を使い、そして何番目かの言葉としてメキシコの中央政府との間のやりとりに必要なこととして、スペイン語をしゃべっている。いわゆる正しいスペイン語という観点からいったら、文法的には完全に正しくないスペイン語なのですが、しかしそのスペイン語というのは、誰かが勝手に頭の中ででっちあげていったものではなくて、非常に長い時間をかけて、出来あがってきて、それをしゃべり、生き、あえていえば戦っている人々がいるというスペイン語です。

これが英語に訳された時に、英語の翻訳者が見つけたノートというのは、非常にすばらしいものだと僕自身は思っているのですが、翻訳者はこれをどのように訳そうかというように考えたというのです。「正しきさ」ということで写しかえるかということを考えたら、これは出来ないという結論に達した。そうではなくて、私がちゃんと訳す、それは正しい、あるいはインテリゲンシャルが使うような英語というものに写そうとした時に、確実に翻訳が不可能であったり、あるいは共約不能ですね。共約不能というのは、通分して、何か同じものさしで物事を計っていくようなことが不可能なという意味ですが、そういうずれが今、現在、同じ時間帯とさえもいえないような形で、彼ら彼女らと私たち、あるいは僕、あなた方が違ってしまうような形で生きている中に確実にある。このずれこそがこの本を読む時の出発点ではないだろうかという、短いノートが翻訳者によって付されているわけです。この中にサバルタンが語る、あるいは語ることが出来るのだろうかという問題を、僕たちは見ていくことができるのではない

かというような感触を僕は持っています。

なぜかというところというのは、これは非常にどでかい風呂敷を広げてしまいますが、グローバルに動いている資本主義というのは、確実におそろしい文化的な権力として、翻訳という力を持っているからだというように思います。違った場所で、違った形で生きているにもかかわらず、例えば僕の労働に、価格がつけられ、賃金が与えられると同様に、チアパスに生きている人たちに対しても、貨幣というのは襲いかかってくるわけですね。しかし、それが国際的につながってしまったら、僕が1日、あるいは数時間、あるいは数分やっていることの価格がその先住民たち、あるいはサバルタンの人たちの1日分にあたり、へたすると1ヵ月にあたりしてしまうかもしれない。それが通分されてしまうような中に生きている、しかし具体的な一人ひとりがいるということに対して、どうやって僕たちは語りかけることが可能なかという問題と並べて、考えてみたいというのが、1点目です。

2点目は出掛ける最中にタクシーを使いましたが、行きがけにラジオを聞いていましたら、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、1963年の5月23日に石川一雄さんが逮捕されることによって、犯人にでっち上げられた狭山事件の判決がまたもや、再審、裁判のやり直しを認めないという結果になったというニュースがありました。僕は学生時代に部落解放運動にもかかわったことがありまして、ずっと注目してきたのですが、例えば冤罪という形で、実際に僕は石川一雄さんが無実の罪をでっちあげられて、事件が起こってから、もう36年以上、彼が犯人であるという決めつけの下でですが、仮釈放という形で獄から出てきて、数年しかたっていない。30年以上、刑務所の中に入れられていたということは、もちろん石川さんという一人の人をめぐっての話ですが、例えばそういう冤罪事件であったら、前に池内靖子さんと一緒にやったジェンダースタディーズの関係で書かせてもらった短い文章の中に、僕は甲山事件の山田悦子さんのことを、サバルタンの問題とも根っこが繋がっているのではないかと書いたことがあるのですが、それはただ物を考える、あるいは学的に抑えていくということではな

くて、私たちのこのあり方の中にもあるのだということ、行きがけに感じざるをえなかったわけです。

だから何かをやれということでは決してありません。しかし考えるということがどこかに届くということは、たぶんサバルタンのことを考えるということと、例えば狭山事件の石川一雄さんの位置とい

うことと、自分とのあり方ということを考え直してみるとという行為もつながるのではないかと思います。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。予定時間をすでに30分越しておりますので、この辺で打ち切らせていただきたいと思います。